

—貧困概念と人間存在—レヴィ＝ストロースを読む—はじめに、蝶番

I. レヴィ＝ストロースを読む

はじめに

飢饉の中を生き延びてきたのが人類であり、天変地異を越えて、食べ、纏^{まと}い、家族を成し、生きつづけている人間であり、富める者と貧しいものが織りなす人間の歴史である。

人間の幸せ、その不足から貧困を測るのが伝統的な厚生経済学的手法でありその拡張が試みられているが、人間の生活、存在様式についての人類学的知見まで降りて行くことで、貧困の構造について新たな視点を得る事ができるのではないだろうか。

☆ 文化人類学について

人類学とは「人類の進化、遺伝、生態、変異、文化、言語、社会組織、宗教、物質文化などについて研究する学問のことを広く人類学」といいますが、生物としてのヒトを対象とする自然人類学と、ヒトの作り出した文化や社会構造などを対象とする文化人類学に区別されます。

文化人類学とは、「世界の民族の文化・社会を言語、習慣、社会構造、家族、道具、芸術などを研究対象として、解明してゆくことを目指し、かつては民族学と呼んでいましたが、最近では文化人類学とか社会人類学とよばれることが多くなり、民族学、民俗学、考古学、言語学、心理人類学、医療人類学、経済人類学など多くの学問領域と境界を接しています。」

(<http://anthropology.jp/what/jinrui.html> より抜粋)

レヴィ＝ストロースは、人類学の独創性は「それぞれの時代において人間性の限界とみなされている地点に立って、人間を研究する事にある¹。」として、それ故に生物学、人口統計学、経済学、社会学、心理学、哲学——との関係をめぐる一連の問題に触れる、「隙間を突く」科学であるとする。

☆ レヴィ＝ストロースについて

クロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss, 1908年11月28日 - 2009年10月30日) はアルザス出身のユダヤ人の家系、イトコ同士結婚の夫妻の下に生まれ、父親の職業は画家であった。エコールノルマル (フランスのエリートコース) の受験準備の高校時代にフロイド、マルクスの影響を受けたと言う。受験をあきらめてパリ大学 (ソルボンヌ) を卒業し法学の学士号を取得するかたわら哲学を学び、1929年アグレガシオン (哲学教授資格試験) に合格し、これに続く実習ではボーヴォワール、メルロー＝ポンティらと同期 (サルトルは一回落ちて、一年後輩) であった。

1935年高校教師を退職し、サンパウロ大学の社会学講師として渡り、休暇中にブラジル内陸のマトグロッソ地方に居住していたポロロ族の調査、1938年から1939年にかけてブラ

1 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P41 講談社選書 2009年6月

ジルの内陸部を横断する長期調査を行い、ナムビクワラ族やトゥピ=カワイブ族など、アマゾン川の支流に暮らす民族の調査をしている。1939年帰国後に服役、マジノ戦線に配属されるが翌年敗戦で除隊、1941年ニューヨークの「新社会研究院」の講師として亡命生活に入る。ここでヤコブソンと出会い1943年には「親族の基本構造」を書き始めている。

1947年パリ解放後フランスにもどり、『親族の基本構造』を完成させて1949、1950年コレッジ教授選へと立候補したが失敗、その後みずからの方法論を冠した初めての論文集『構造人類学』を(1958年)執筆し、ユネスコの反人種主義キャンペーンのための小冊子『人種と歴史』(1952年)を執筆している。1955年の自叙伝的色彩をもった民族誌風の著作と言われる『悲しき熱帯』の刊行により、その名は一気に世間に知れ渡ることになった。

1959年に親友メルロー=ポンティの尽力もありコレッジ教授就任がかない、これと前後して、研究活動の中心は拠点としてはコレッジにおける毎年度の講義に、主題としては高等研究実習院のセミナー担当以来取り組んできた、未開社会の宗教研究とりわけ未開社会の神話の研究へと移った。(その記録が後年『パロール・ドネ』として出版された。)

パリの人類博物館や高等研究実習院の人類学関連部門と連携しつつセミナーを運営しながら研究活動を行うという活動は、1984年のコレッジ退職まで続けられ、この間に刊行された著作は、1962年『野生の思考』、『今日のトーテムズム』、1964年～1971年の『神話論理4巻』、そして1969年度講義をもとにして1992年に刊行された『大山猫の物語』など。まず講義において着想が練られ、聴講者との議論を経たのちに著作として刊行されている。その後、『やきもち焼きの土器作り』『大山猫の物語』『永遠の回想』などを刊行し2009年100歳にて没した。

専門分野である人類学、神話学における評価もさることながら、一般的な意味における構造主義の祖とされ、彼の影響を受けた人類学以外の一連の研究者たちとともに、1960年代から1980年代にかけて、現代思想としての構造主義を担った中心人物とされている。

コレッジ・ド・フランスで催された1998年90歳のお祝いでの挨拶の中で、レヴィ=ストロースは、老いの日々についてこう語った。

「こうして今日の私には、一人の人間の四分の一あるいは半分でしかない現実の私と、全体の理念をまだ生き生きと保持するヴァーチャルな私とが存在しています。ヴァーチャルな私は、著作の計画を立て、章立てを考案し現実の私にこう言います。『さあ続きは君がするのだ』すると、もうそうはできない現実の私がヴァーチャルな私に言います。『それは君の仕事だ。全体を見る事ができるのは君なのだから』今の私はこのおかしい対話のなかで日々を送っているのです。」

(ウィキペディア、「闘うレヴィ=ストロース」「寝ながら学べる構造主義」、他)

1. 自然と文化を繋ぐ蝶番としての婚姻規制

①自然と文化

2009年10月30日100歳の長寿を全うしたレヴィ＝ストロースは、その最初の著作「親族の基本構造（1949年）」において、その序説第1章を自然と文化としている。この中でレヴィ＝ストロースは、「すべて普遍的であるものは、人間にあっては、自然の秩序を表し、自然発生性によって特徴づけられる。そして、ある規範に縛られるものはすべて文化に属し、相対的であり、特殊であるという属性を示す。²⁾」として自然と文化を区別している。

自然と文化の区別、関係については、ギリシャの昔から「<ロゴス＝知性・精神>/<パトス＝感性・身体>」と言う単純な分割線が引かれ、これが<文化>/<自然>の対立にも置きかえることになった³⁾と言う指摘がみられる。

②婚姻規則（インセスト・タブー）の謎

1949年、『親族の基本構造』が出版された当時、進化論的、伝播論的、そして機能主義的な人類学は「どうして近親の位置としては同じイトコのなかのあるタイプのイトコとの結婚が優先され、別のタイプのイトコとの結婚は「インセスト（近親婚/近親相姦）」として禁止されるのか」また「人間社会に普遍的にあるこのタブーは何のためにあるのか⁴⁾」と言う二つの謎を解く事ができなかった。

この二つの謎に対してレヴィ＝ストロースは、この規則が、自然の要請と文化の要請の双方にまたがっているとして、「それぞれの文化によって恣意的で特殊な規則でありながら、普遍的なものと言う性質を持っているが故に、婚姻規則（インセスト・タブー）は自然と文化の相いれない二つの次元の両方に属する矛盾した規則であり、自然と文化を分けると同時に繋ぐ蝶番となっているような特異な規則⁵⁾」として現れるとしている。

③ 婚姻規則と親族関係

親族関係を規定している婚姻規則（インセスト・タブー）は、社会的な規律として集団の存続のために必要な規制（文化の領域）でありながら、すべての社会に於いて見られる、生物種としてのホモサピエンスに普遍的な規律（自然の領域）であると考えられる。

『親族の基本構造』の主題について、渡辺公三は「親族関係の生成こそ人間の生成すなわち、人間の自然状態から文化の状態への移行をしるしづけるもの」として、エンゲルス

²⁾ クロード・レヴィ＝ストロース 監訳馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上）』P64 番町書房 昭和62年3月20日

³⁾ 丸山圭三郎 『言葉と無意識』P28 講談社現代新書 2009年7月

⁴⁾ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P082 ちくま新書265 筑摩書房2013年9月

⁵⁾ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P083 ちくま新書265 筑摩書房2013年9月

の「サルの間人化に当たっての労働の役割」をもじりつつ、「サルの間人化における親族関係の役割」⁶こそが主題であるとしている。

自然と文化という二つの別個のものともみなされる異なる領域のつなぎ目にあつて、人間が自然から文化状態に移行する時の、「人間集団のカテゴリー化と表裏一体をなして、集団間のコミュニケーションを生成する。⁷」のが婚姻規則（インセスト・タブー）であり、人間社会は、婚姻による女性の他集団への交換を通して、各親族集団（親族、姻族など）の形成、そして集団間の交流を生じせしめて促すのであり、このようにして人間は文化へと、親族をなし、社会を形成し、自然から文化へと移行したという。

西洋人の略奪によって集団の消滅の危機に瀕するナビクワラの人々は、若きレヴィ＝ストロースの眼前で、遭遇した集団との婚姻関係を取り結ぶことで生きて見せたという⁸。

貧困概念と人間存在—レヴィ＝ストロースを読む—音韻論と変換と構造—

3. レヴィ＝ストロースの「構造」

レヴィ＝ストロースは複雑で脈絡のない「婚姻規制（インセスト・タブー）」の多様に見える規則の間関係について「 \cdot ・親族の基本構造は3つしかない。3つの構造は二つの交換形式を使って構築される。⁹」とその構造を明らかにし、この構造を解明するにあたり、構造言語学のヤコブソンの音韻論から「無意識的な2項対立」の概念を、生物形態の変異について数学的研究を行ったダーシー・トムソンから「変換¹⁰」の概念を導入している。

① 音韻論と「無意識的な2項対立」

音韻論とは言語がどんな音からできているかを明らかにする学問だが、「無意識的な二項対立」という概念は、音の組合せ（シニフィアン）と、指し示す意味（シニフィエ）の関係を記号（シーニエ）として理解するソシュールの言語論における、言語の恣意性を下敷きにしていく。

言語の恣意性とは、人間を取り巻く物的な状況やどんな物理音によって言語が構成されているのかとは無関係に、音が自由に、恣意的に組み合わせられて意味を表すという、記号としての言語の性質である。

言語における音声は物理音でありながら、「その音を人びとがどう区別しているか」が問

6 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P125 平凡社新書 498 2009年11月

7 同上 P127

8 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P128 平凡社新書 498 2009年11月

9 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P131 平凡社新書 498 2009年11月

10 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P052 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

題であり、この区別も言語毎に成立している「一種の文化（もしくは社会制度）¹¹」であるという。その単位、音素を発見したのはトゥルベツコイである。

音素とは日本語をローマ字表記した時の一字一字にあたるような、音を区分け意味を識別する為の最小の音の単位だが、その音素には、それぞれの単語の音を区別して聞きわけ、識別に役立つ対立軸、たとえば無声/有声、母音/非母音、密/疎などの対立関係があり、それを弁別特性（示差的特徴）としての二項対立を考え、弁別特性（示差的特徴）のセット（群）として言語音声を整理して世界中の言語を捉えたのがヤコブソンである。

レヴィ=ストロースとヤコブソンは亡命先のニューヨークで出会い、互いの講義を聴講し合ったという仲だが、ヤコブソンの講義録「音と意味についての六章」の出版にあたって序文を書いたのがレヴィ=ストロースである。ヤコブソンは上記特別特性（または示差的特徴）である音素の束を「音素の対立は二項対立の組み合わせで表現できる¹²」事、さらにその数(セット)は12である事を突き止めて有名な母音三角形と子音三角形を提案している。

② 記号としての言語

記号である言語、『無意識からなる二項対立（差異のみからなる）の体系』としての言語においては、「体系における音素相互の対立こそ重要」なのであり、一つの音素と次に発せられる音素との対立関係、その組み合わせ方、音素間の関係によって、その指し示す意味が生じる。音素それ自体の音声的個性とその音が指し示す意味の間には関連性は皆無である。

音素の配列、その「響き」と指し示す「意味」の間には、いわば無意識からの指定が発生するのみであるといえよう。それが各言語によって特徴を異にする各言語集団の取り決めであり、その有する文化内容であると言う。

人間における観念世界は、有限である眼前の物質世界に縛られずに展開するという性質、言語の恣意性故に「言語が何を指し、何を意味するかは、言語の内部で決まる事であって、物質世界と直接に結びつかない。つまり、物質世界のあり方とは独立に、言語のシステム（ひいては文化のシステム）を複雑化し、洗練して行く途^{みち}が開かれている。人類はそうやって、感性や思考をどんどん高度なものにしてきた訳だ。¹³」と説明されている。

レヴィ=ストロースはこの12ビットで、地球上のすべての言語を構成する音素を網羅できると言う言語の構造を、その分析手法を、人間社会の制度、婚姻規則にあてはめて検討

11 橋爪大三郎 『初めての構造主義』P59 講談社現代新書 講談社 2006年9月

12 橋爪大三郎 『初めての構造主義』P62 講談社現代新書 講談社 2006年9月

13 橋爪大三郎 『初めての構造主義』P48 講談社現代新書 講談社 2006年9月同上

を加えようとした訳である¹⁴。

③ ダーシー・トムソンからの「変換」

ところでダーシー・トムソンは 1942 年頃に、動物形態変異の様相を、座標変換という視点から読み解き、動物形態の変化を『成長と形態』の中で解説をしている。同じ動物種が、個別環境への適応を通して、それぞれの形態を次第に変異、変換させる過程を追っている。

魚は頭と胴体と鰭と尾と言う 4 組織で全体が構成されているとして、この鰭（ひれ）の形、尾の形、時には胴体、頭が、伸長し、あるいはよじ曲がり、押しひしがれて、形態の変形を伴いつつ魚で有り続ける。変化しつつ、魚としての構成（構造）を保つと言う関係である。

この魚としての形態を保つという意味では、共時性（時代を越えて）として魚なのだが、構成単位（ひれ、尾、胴体など）は通時性（その時代に特徴的に）のレベルで変換する。

レヴィ＝ストロースは後年「都合良くいくらでも伸びたり縮んだりするゴム膜の上に、図形を書いて、伸び縮みさせながら別の図形を重ねることができるかを考えてみせている。この変換が位相変換である。位相変換に関して不変な性質を位相的性質と言う。これが<構造>である¹⁵。」と説明しているというが、たとえばガラパゴスの動物達の形態とそのバリエーションが思い浮かぶであろう。

動物達の形態変化は、実体の変容として連続的な変異、変容だが、レヴィ＝ストロースの<構造>と<変換>のアイデアの一つのルーツであると思われる。レヴィ＝ストロースの変換は、さらに「物質世界のあり方とは独立に」展開する人間の精神機能が介在する「融通無碍」な「変換」、その展開過程であり、それらを抱える「構造」である。

「不変項は、新秩序の形成や崩壊と言う歴史的・通時的「変化」とは異なる多様な共時的「変換」の可能性をはらんでいる。¹⁶」との説明が示しているように、変換の側面を度外視された「不変項」ではなく、変換を孕む、不断の変換という動きを抱えつつ、一定の構造下にある一連の事象を、「構造」として捉えていることが理解される。

「変換と構造の不変性との関係こそ、構造の概念を理解するうえでの最も重要な鍵である¹⁷」との指摘のように、レヴィ＝ストロースは『構造とは要素と要素間の関係からなる全

¹⁴ 内田樹『寝ながら学べる構造主義』P154 文春新書 文藝春秋 平成 23 年 11 月 15 日

¹⁵ 橋爪大三郎 『はじめての構造主義』P170 講談社現代新書 2006 年 9 月

¹⁶ 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P148 平凡社新書 498 2009 年 11 月

¹⁷ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P064 ちくま新書 265 筑摩書房 2013 年 9 月

体であって、この関係は一連の変換、変形過程を通じて不変の特性を保持する¹⁸⁾とする。

そして〈構造〉の概念の提示は、「人類学的研究に、歴史とは異なった共時性のレベルで作動する構造と言う不変項を導入しなければならないと言う主張でもあった。¹⁹⁾」と指摘されており、「共時態のなかのにある連動すなわち変換をとらえることこそレヴィ＝ストロースの構造分析が狙ったものだった²⁰⁾」と言う。

一貧困概念と人間存在—レヴィ＝ストロースを読む—婚姻規則の謎解き

4. 婚姻規制（インセスト・タブー）の構造

『親族の基本構造』のテーマは、人間の自然から文化への移行を記している婚姻規則(インセスト・タブー)を包む構造について、「多様な交叉イトコ婚の諸体系を互に変換関係にある変換群として捉え、一つの構造をなしている事を明らかにする」ことを目的にし、その時、音素が記号を構成して意味を示す言語の構造に相当する構造を、婚姻規則の中に示す事であったと思われる。

①親族構造と3つの交叉イトコ婚

ヤコブソンの講義録「音と意味についての六章」の序文においてレヴィ＝ストロースは、インセストの禁止(婚姻規則)について「固有の表意作用はもたないが、表意作用を形成する手段となる音素と同様、インセストの禁止は別個のものとみなされる二つの領域のつなぎ目を成すと私には思われた。音と意味との分節に、他の平面で自然と文化の分節が対応する事になったのである。」²¹⁾と音韻論における音と意味の間にある音素と、自然と文化の間にある婚姻規則（インセストの禁止）の役割が重ね合わせられている。

i) 交叉イトコ婚の3類型

人類学ではイトコを4つのタイプに分けており、自分の親の兄弟のうち、親と異なる性の親の兄弟の子供（イトコ）を交叉イトコとよび、親と同じ姓の親の兄弟の子を平行イトコと呼び、母方のイトコと父方のイトコを区別して父方または母方交叉イトコと呼ぶ。

イトコとの婚姻規則（交叉イトコ婚）には3つのタイプがあり、一つは母方交叉イトコ婚で、男から見て母方交叉イトコや、又イトコ、又又イトコとの結婚が望ましい、あるいは義務とされる規制がある。二つ目は父方交叉イトコ婚、三つ目は双方(父方、母方を区別しない)イトコ婚である。この規制は同時にそれ以外のタイプのイトコ、平行イトコとの結

18 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P46 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

19 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P148 平凡社新書 498 2009年11月

20 同上 P149

21 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P126 平凡社新書 498 2009年11月

婚が禁止されている。そして母方交叉イトコ婚の婚姻規定のある社会が広く見られ、父方交叉イトコ婚は稀である。

ii) 半族と婚姻規則

また人類学では、その社会を明確に二つの集団に分けられているような社会組織を「双分組織」といい、その二分された各々の集団を「半族」と呼んでいる。自分の半族とは結婚できずもう一方の半族の者と結婚するという外婚制を伴っている。オーストラリアの先住民（アボリジニ）の社会に普遍的に見られており、南北アメリカ、メラネシアにもみられる。オーストラリアにおいては半族が更に婚姻クラスに分かれて4クラス制や8クラス制などと、より複雑な体系をもっていた。

レヴィ＝ストロースはこのような親族関係（社会組織）は婚姻規則（インセスタブー）を伴っており、この婚姻規則の中に言語における音素、弁別特性の束に相当する2項対立の単位を見出し、もって交叉いとこ婚の構造、親族の構造を示そうとするわけである。

②『親族の基本構造』

親族関係の基本構造を読み解くレヴィ＝ストロースの独創性は、「女性の交換」という新たな視点で婚姻規則を眺め、この交換の形式の中に「一般交換」という新しい概念を創出して、二つの対立する交換形式、「限定交換」「一般交換」の二項対立を提示し、この二つの概念との関係からそれまでの人類学の問題意識（双分組織、3つの交叉イトコ婚）を整理しつつ、その構造を示した事である。

「限定交換」とは社会内を二分する集団同士（人類学的には双分組織と呼ばれる）が互いに結婚の相手を提供（交換）しあうものであり、「一般交換」とは3つ以上の集団が世代毎にある方向で、結婚相手を提供（交換）するものである。父方交叉イトコ婚は稀に見られるのだが、主に母系社会でみられ、母方居住で婿入りなので、女性の交換が明示的には表れない²²とされる。

この「限定交換」と「一般交換」を、個々の婚姻関係、交叉イトコ婚との関係から見ると、次世代目の（息子、娘達）、次次世代目の（孫息子、孫娘）の世代まで経過してみると、「限定交換」は「双方交叉イトコ婚」として現れる。「一般交換」は「片方交叉イトコ婚」としてあらわれるが、そのうちの母系交叉イトコ婚は親族関係が広がってゆくが、父方交叉イトコ婚は、母方交叉イトコ婚とは対立的に親族関係がひろがらない、憎悪の関係²³とされる。

婚姻を女性の交換として捉えて、男性ではなく女性の婚姻を中心に考えると、たとえば

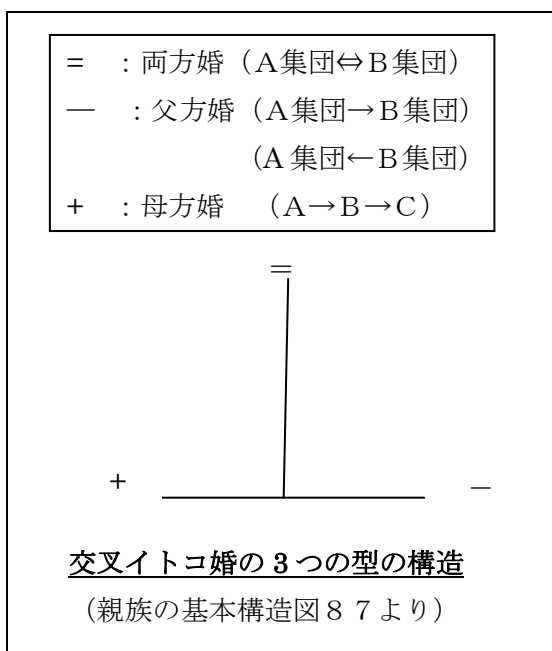
²² 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P109 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

²³ 橋爪大三郎 『はじめての構造主義』 P109 講談社現代新書 2006年9月

親の世代でA集団からB集団へ提供された女性（母親）に対して、その子の世代の女性（姉妹）は、父方イトコ婚なので、父方（婚家）側B集団へと提供され、提供した側、母方A集団にはもどらない。孫の世代でも父方イトコ婚なので、孫娘は祖母方のA集団には交換されずに、父方（B集団）へと提供されるのではないだろうか。そのため戻されない「価値ある女性」を提供せねばならないA集団にとってB集団との関係は「信頼とは対極の嫉妬・憎悪²⁴」の関係となりえる。このために娘、孫娘が女性の出身集団である母方に返される互酬的な母方交叉イトコ婚とは反対に、互酬的ならざる交換形式として2項対立関係を形成しているのではないだろうか？

生まれてきた次世代の孫娘を、娶る事ができない母系集団にとって、B集団は代を重ねるごとに「信頼とは対極の嫉妬・憎悪」の関係になり得るとおもわれる。

レヴィ＝ストロースは交叉イトコ婚の三つの形式は{双方交叉イトコ婚（限定交換）／片方（母方か父方の一方）交叉イトコ婚（一般交換）}ともう一つの（交換ネットワークをもたらし安定的な関係をつくりだす／つくらない）という二つの二項対立の束と考える事により、互いに変換の関係にあり、一つの<構造>をなしていると捉えている。



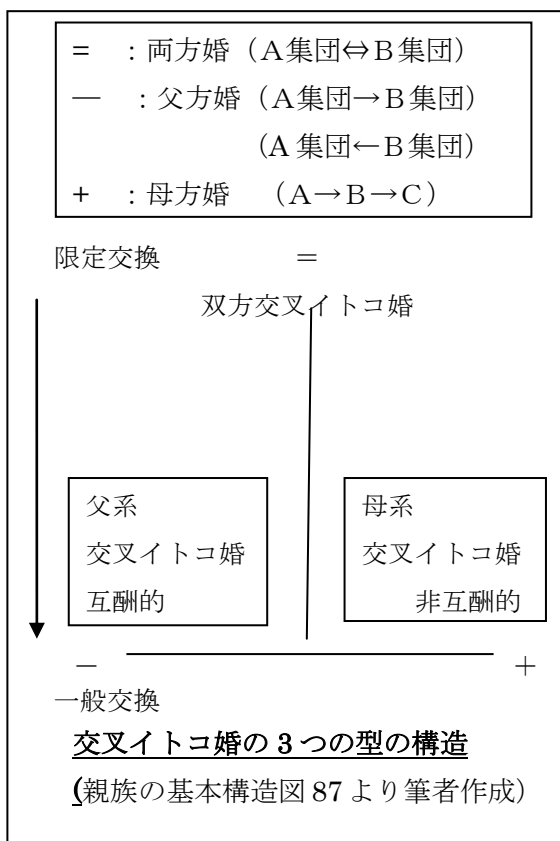
渡辺は「女性の交換は『限定交換』と『一般交換』と言うふたつの交換の体系を生み出し、それが親族の基本構造と呼ばれる²⁵」と纏めている。

小田は「限定交換となる双方交叉イトコ婚一般交換となる母系交叉イトコ婚、そして一般交換と限定交換の間となる父方交叉イトコ婚の体系が互いに変換の関係にあり、一つの構造をなしている²⁶」と指摘する。

また、父系交叉イトコ婚は「社会的結合をつくりだすための『女性の交換』としては欠陥ある故に採用されないというわけである」と指摘する。

(母系交叉イトコ婚では交換ネットワークをもたらし、父系交叉イトコ婚ではもたらさない事に注目して、片方交叉イトコ婚の父系、母系は、もう一つの二項対立関係にあると考えれば、二つの2項対立の束として、3つの交叉イトコ婚は互いに変換の関係にあると考える事ができる。)

²⁴ 橋爪大三郎 『はじめての構造主義』 P109 講談社現代新書 2006年9月
²⁵ 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P135 平凡社新書 498 2009年11月
²⁶ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P111 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月



このようにしてモーガンの説である「近親婚の生物学的不利が気付かれて排除された」のでも、ヂュルケムの説である「トーテム信仰における同族の女性の血を見る事の恐怖から」でもなく、複雑な婚姻規制と一体的な親族の基本構造を、レヴィ=ストロースは「一連の現象の基底に女性の交換によるコミュニケーションと言う機能²⁷⁾を確認した上で、ここから「身内の女性を諦め、外部の女性を獲得せよ」と言う命令として位置づけ、婚姻の禁止の命令ではなく「女性の交換の命令」と言う視点で婚姻規則を捉えた訳である。

ヤコブソンの音韻論の講義録(音と意味についての6章)の出版に際しての序文で、レヴィ=ストロースは「・・・この形式は、生物集団の分節が可になると同時に必須ともなって、交換の網の目をつくりだし、こ

れを通して集団相互のコミュニケーションが生じる為には不可欠なのである・・・²⁸⁾と纏めて、親族関係の生成はインセストの禁止(婚姻規則)とは表裏一体的である事を示唆していると言えよう。

人間社会は婚姻規則(インセスト・タブー)を受け入れた遠い昔から、その婚姻規則を幾数世代に渡って繰り返して、交叉イトコ婚として現れる3形式のうちの一つ、父性交叉イトコ婚にあっては、互酬的な交換とはならず、嫉妬と憎悪²⁹⁾の関係であると観察されている。しかしこの形式は、(返されない女性の交換への抵抗、修正であるかの如く)入り婿婚、母系制的な家族制度、子供の交換が採用されているとの観察³⁰⁾もあり、そしてこの形式が広く広がってはゆかなかった事も知られている。

しかし、われわれ現代社会の婚姻形式は経済機構や心理機構が結婚相手を選択するメカニズムをもつ複合構造と考えられるのだが、この形式がこの婚姻規則(インセスト・タブー)からの、ある「変換」を通して説明する事、一般交換から複合構造への移行について

²⁷⁾ 渡辺公三 『闘うレヴィ=ストロース』 P134 平凡社新書 498 2009年11月

²⁸⁾ 渡辺公三 『闘うレヴィ=ストロース』 P126 平凡社新書 498 2009年11月

²⁹⁾ 橋爪大三郎 『はじめての構造主義』 P109 講談社現代新書 2006年9月

³⁰⁾ 小田亮 『レヴィ=ストロース入門』 P110 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

は、いくつかの仮説があつてまだ十分な論理的検証を果たされていないという³¹。

この後レヴィー＝ストロースの研究は「野生の思考」へ、さらに神話研究へとすすむのだが、その理由として、自然から文化への移行の様態、異なる二つの間を繋ぐ蝶番（ちょうつがい）を包む構造といったものは「無意識と言う形で、人間の精神に現存している。」としても、その事が親族構造では確認できなかったので、社会生活上の外約規制のより少ない神話研究へと向かったとしている³²。

一貧困概念と人間存在—レヴィ＝ストロースを読む—『野生の思考』から『神話論理』へ

3. 『野生の思考』から『神話論理』へ

『今日のトーテミズム』と同じ1962年に出版された『野生の思考』は、その表紙にパンセ（思想、思考）と同音異義語である三色すみれ（パンセ）があしらわれているという、しゃれた言葉遊びになっている。その最終章「歴史と弁証法」はサルトルの実存主義、弁証法的な思考を痛烈に批判している事で有名だが、1964年の一巻の発表から始まる四巻までの『神話論理』への「方法論序説」としての意味をもつ³³とされる。

『神話論理』は、「アメリカ先住民諸社会の神話研究は文字通りレヴィ＝ストロースのライフワークになっている³⁴」とされる大著であり、「ブラジルのフィールドで始まった人類学的研究は、まず親族関係を対象として十数年をかけてオーストラリア、アジアを巡った後にアメリカ大陸の神話世界に帰還した³⁵」とされるレヴィー＝ストロースの研究の核心部分である。

① 『野生の思考』

『野生の思考』は表表紙には「三色すみれ」、裏表紙にはスグリ（イタチ科の大形の哺乳動物）の挿絵があしらわれている。北米先住民ヒダツァ人の神話では彼らに狩りを教えたのは姿を変えられる程の超自然的な力を持つ動物だと言うが、当時の人類学者の思考ではその動物種が小型の熊らしいのだが、特定はできなかった。

レヴィー＝ストロースは、ヒダツァの鷲は、狩人が穴に隠れて、穴の上に置いた餌に釣られて鷲が地上に舞い降りる瞬間に素手で鷲を捕まえるという特殊な方法である事、一方スグリは人の仕掛けた罠の餌ばかりでなく、時には穴にまで自ら入り込んで、罠さえ持ち去ると言う習性をもつ事を考慮して、このような鷲をする猟師が「自分と同一視する動物

³¹ 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P137 平凡社新書 498 2009年11月

³² 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P117 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

³³ 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P167 平凡社新書 498 2009年11月

³⁴ 同上 P160

³⁵ 同上 P157

がスグリ以外ではあり得ない³⁶」事を検証した上で、この動物を「スグリ」（イタチ科の大形の哺乳動物）と特定していった。

レヴィー＝ストロースはスグリを選ぶヒダツアの人々の、このようないわば「野生の思考」を示して、オーストラリアのトーテムズムの中の生物種は、自然種（タカとカラス、フクロウとヨタカなど）の習性や行動や外見への関心が、「食べるのに適している」からではなく「考えるのに適している」から選ばれている³⁷と説明をする。そしてその選択の仕方や分類を「トーテム的分類」とし、そのような自然と共に動き、自然に親和的な思考方法を「野生の思考」と名付けたのである。

野生の思考では、自然の動植物と接して暮らし、その生態を知り尽くして生活を営む人々に於ける、人々が生活の中のさまざまな場面にあって体験する、時々遭遇する差異感覚に触発される、五感に響き、感性に響く、感情や印象からの、さまざまな類推を託された「自然種」が登場する。その類推、「隠喩³⁸」「換喩」「反転³⁹」あるいはアナロジーは、様々な「2項対立のコード」を抱えて、それらを媒介項にして展開される構造を有しており、その分析によって「神話の論理」が顕かにされてゆくことになる。

この類推の連関過程、その構造が、川田順造の「表面的にはかけはなれていると見える兆候同士を、思いかけない遣り方で重ね合わせる事によって意味を発見すると言う、……構造主義の一つの基本となった形⁴⁰」であり、構造と変換の関係である。

渡辺は野生の思考を「季節の推移や天体の動きが織りなす自然の変化のなかで、動植物すなわち多様な種がくりひろげる生命活動に注意を凝らして観察し、自然の中での自らの位置付けとそこで生きる意味を、自然種の多様性そのものを手段として把握しようとする思考のあり方⁴¹」としている。

② 『今日のトーテムズム』ートーテムズムを否定する

ところで当時の社会人類学と宗教人類学の関心の中心を占めるに至っていた「トーテムズムの理論」は、アメリカ北東部のオブジァ族の研究から発展し、ポリネシアのティコピアの事例、そして19世紀後半以降のオーストラリアの事例の研究によって理論化されていた。しかし当時の機能主義的、功利主義的な検討からは「様々な社会がトーテムとして選んだ

³⁶ 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P182 平凡社新書 498 2009年11月

³⁷ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P126 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

³⁸ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P130 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

³⁹ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P134 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁴⁰ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P61 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁴¹ 渡辺公三編 『文化人類学文献辞典』 P2 弘文堂 2004年12月

動植物の、経済的あるいは単に現実的な役割を決定する事⁴²」が困難であった。

この問題に対して、レヴィ＝ストロースはまず、イギリスの人類学者らが、神話と社会構造の関係についての比較研究によって、「トーテム的分類」である特定の動植物種が選択されるのは、神話と社会構造の間の「アナロジー」によっているとしている所から、もし「アナロジー⁴³」であれば、それは抽象的な問題構成をすることでしか理解しえないのであり、知性によって認識することが可能な事柄であり、つまり普遍的な思考の内側にあつて、客観的である事が確認できるとした。

さらに、ベルグソンやジャン＝ジャック＝ルソーからの「自然状態から文化状態への移行を示す最も原初的な論理的分類は、動植物界から直感的に感覚される対立をもとに、人間にもたらされたものである⁴⁴」との論述を見出して、「トーテム的分類」は、心の内側から対象に向かおうとする哲学者に於いて（レヴィ＝ストロースはかつて哲学から人類学に転向している）、この様な思考のあり様が的確に理解されていたとも指摘している。

こうしてレヴィ＝ストロースはボアズの「トーテミズム研究は、名前や標識、超自然的関係への信仰、食事に関する禁忌、外婚制、親族集団など、性質を異にするものを取り込んでいるが、すべてを唯一の類型に入れることは絶対に不可能である。⁴⁵」をひいて、「トーテミズム」と言う概念の設定自体を批判、否定した訳である。

トーテミズムは、当時は原始的な宗教として、現代の知性による理解を越える呪術的な世界とされていたのだが、それを否定して「人間集団間の『文化の系列』と、動植物などの自然種間の関係からなる『自然の系列』との間の照応関係による分類⁴⁶」であり、現代を生きる我々にも有る普遍的な思考、現象の中の特殊ケースとして捉えるべきとしている。

③ プリコラージュ（器用仕事）と「野生の思考」

『野生の思考』の第一章は「具体の科学」であり、その中で「野生の思考」は現代フランスにも残っている「プリコラージュ（器用仕事）」にたとえられている。「プリコルール」とは「くろうととはちがって、あり合わせの道具材料を用いて自分の手でものをつくるひと⁴⁷」のことだが、このような仕事に係わる思考方法の中に「野生の思考」を見出している。

42 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P50 講談社選書 2009年6月

43 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P52 講談社選書 2009年6月

44 同上 P54

45 門口充徳 <http://www.d4.dion.ne.jp/~mkad/totemism.html> 2013/01/10

46 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P121 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

47 レヴィ＝ストロース 大橋保夫訳『野生の思考』P22 みすず書房 1976年5月

その思考は、生活上の必要性やある種の美意識上の要請などに従い、手持ちの材料の属性を良く眺め、たとえば形、手触り、色合いなどをすべて知り尽くしたうえで、自らの具体的で体験的な知恵を働かせ、個々の材料との間での会話のような営みをとおして、自らの要請に沿って物を組み立ててゆく、といったような思考手順をとっている。

レヴィ=ストロースは、このように象徴機能を働かせ、比喩（イマージュ）、心象といったものに近いこの思考を、「既に一般化能力をもつものであり、従って科学的でありえる⁴⁸」とも言う。それは生きる上での、時々々の必要性にそって、いわば多方位、360方位に向かって放たれる、メタフォア、象徴機能を介在させつつ、別の次元へと組み立てようとして取り入れられてゆく、思わぬ展開を遂げる思考である。

たとえば「プリコラージュ（器用仕事）」において、手持ちの様々なかけらが、職人によって今必要なものを拵えるために、全体の中の一つの構成要素としてかけらの特徴が生かされるように、時々々の生活上の要請を賄おうとする人間の思考、自然の中のあらゆる事物を多方位に渡って観察し、活用するための工夫、対象と共に動く思考とでも言おうか。

近代科学的な思考であれば、対象物は目的性によって切り取られ、限定されてゆくのだが、そうではなく、個々の材料、かけらは職人との間で「話し相手」であるかの如くにその持てる特徴を生かされつつ、そこに組み立てられてゆく。事物や自然などの対象と交錯しあって進む人間の思考といったものであろう。

④ 近代的思考と野生の思考

「野生の思考」は、「感覚的な特性をいったん捨象して抽象化一般化することで射程を広げ累積的に発展する科学的思考とも異なる『具体の科学』であり、・・・⁴⁹」、そして「個人意識を社会や階級へと『全体化』することで個と普遍を媒介し得る」とする歴史意識とも異なっているとして、いわゆる近代的思考とは対置されている。

近代科学的な思考は、その個々の対象の個別性を捨象して行われる一般化であるとする、野生の思考の行う一般化は、それぞれの個別性によって支えられ、一般化のゆくえを作る、「構造化」のようなものだろうか。

あるいは「感性と理性を切り離さない普遍的な人間の思考⁵⁰」としての「野生の思考」と科学的思考の共存を妨げているものは、「自分達の世界を『未開』とは相いれない合理的な

48 レヴィ=ストロース 大橋保夫訳『野生の思考』P27 みすず書房 1976年5月

49 渡辺公三編『文化人類学文献辞典』P2 弘文堂 2004年12月

50 小田亮『レヴィ=ストロース入門』P125 ちくま新書265 筑摩書房 2013年9月

世界⁵¹』として、たとえばトーテミズムという概念をつくりあげる西欧近代の側の独善的な思考なのかもしれない。

レヴィ＝ストロースは近代科学と野生の思考の連続性については「現代の科学が感性と知性の再結合に向かっているということなどを挙げて、近代科学と野生の思考が対立するものでは無いと言っており、現代の科学によってそれが再認識されつつある⁵²。」とする。

そしてこのような『野生の思考』が「近代の知」への根源的な批判の書と言われるのは「失われた過去の知恵あるいは未開の思考を持ちだしたからではない。そうではなく、具体の科学としての野生の思考と近代科学をともに広い意味での科学的な思考だと認めた上で共存する二つの思考のうち、野生の思考の方をより普遍的な思考だと主張した⁵³」からだと言われている。

貧困概念と人間存在—レヴィ＝ストロースを読む—神話論理とその読み解き—

6. 神話論理

『今日のトーテミズム』は、動植物を祖先とみなす親族集団（トーテム集団）に婚姻規則や食物禁忌が結びついている「トーテム体系」という「未開人」に特有な思考とされるものを、19世紀の人文科学が異文化研究に託してでっち上げた幻想にすぎないとして解体する、いわば『否定的な作業』であった。⁵⁴と指摘される。

これに対して『野生の思考』の論述は、この「自然と親和的な思考の活動を、ポジティブな形で取り出す事を目的にしている」⁵⁵とされているように、レヴィ＝ストロースは「野生の思考」を駆使して、神話論理を読み解こうとする訳である。

① 神話論理の構成

『神話論理』は四部で構成され、南北アメリカ先住民諸社会の神話を800以上、それらの異伝を含めると1400以上を扱って⁵⁶おり、神話はそれぞれM1, M124などとナンバーが付され、基準神話M1との関係から分析される。1964年第一巻「生のもので火にかけたもの」、第二巻「蜜から灰へ」、第三巻「食事作法の起源」、1971年第四巻「裸の人間」で完結する。

⁵¹ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P123 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁵² 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P124 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁵³ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P124 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁵⁴ 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P185 平凡社新書 498 2009年11月

⁵⁵ 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P185 平凡社新書 498 2009年11月

⁵⁶ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P160 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

第一巻では、自然から文化への移行は料理の起源によって語られ、神話的思考によって選ばれる二項対立は、生のもものと火にかけたもの、新鮮なものと腐ったもの、高いものと低いものなど、感覚的な事象同士の対立、感覚の論理による対立とされる。人間における「食」と「衣」の起源は自然状態から文化状態への移行である神話の手放す事のできない二つの重要なテーマであり、この二つの起源を語る神話の間には相互に変換の関係が推論され（料理と火、水・裸と装身具）検討される。

二巻では感覚の論理による対立から、空っぽのものと詰まったもの、内のもの外のものと言った形態の論理に基づく対立へと移り、火を入れて調理される対象である生の肉となる動物、そして食用の植物の起源を語る神話の変換関係が検討される⁵⁷。

三巻において基準神話 M1 であるポロロの「鳥の巣あさり」に関するアマゾン川源流近くに住むトゥクナ族の、狩人モンマネキの神話のなかで、食と衣を確保するための労働、狩猟や農耕(労働)の開始と、死すべき寿命を持つ人間の死の開始が関連付けられ、人間の命の周期性から、女性の生理の周期性、妊娠と出産、季節、月周期、更には天体や宇宙の周期運動も関連付けが分析される。ここでは各項の対立関係ではなく、項と項の関係という次元の異なる広がりから、離れた地域の神話の相互の変換関係が探りだされる。

四巻では、それまでの感覚的、形態的、関係的な対立のすべてを扱いながら、北アメリカ西岸の限定された地域の神話を扱って、ポロロの「鳥の巣あさり」を基準神話とする変換関係が探られ、その驚くほどの近似性が示される。

②『神話論理』の読み解き

レヴィ＝ストロースが神話の中に見出す「トーテム的分類の思考」には、「自然種の間の変換関係と人間集団相互の変換関係が類似性による『隠喩』⁵⁸」としての結び付き、またカラスとタカのように意味論的に隣接した、あるいは空間的に隣接した「隣接性による『換喩』⁵⁹」、そして「換喩と隠喩とのあいだの転換ないし反転⁶⁰」が指摘されている。

『神話論理』の読み解きには、出発点においては、前後の筋書きをばらばらな出来事に解体して「神話素」という単位にわけて、「神話素」相互の関連を考察するという手法、親族の基本構造以来の音韻論における音素とその機能に関連させる手法がめざされ、神話素間での隠喩、換喩、反転などの変換を検討する手法を提示している。

しかし実際には「どこか似ている他の神話や異伝をできるだけ多く集めてグループにして、そのグループの間の変換関係を考察する⁶¹」と言う手法が採られている。この手法も集められた神話グループを、一つの単位として、他のグループとの相互の「関係」を考察すると

⁵⁷ 同上 P189

⁵⁸ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P131 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁵⁹ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P130 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁶⁰ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P134 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁶¹ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P163 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

言う、神話素をめぐる手法、「関係を考察する」という共通する思考方法である。

一、二巻では、MI と番号を付けられた神話（ブラジルのポロロ社会の「鳥の巣あさり」の神話）を基準神話として、基準神話との間でそれぞれの神話はどのような変換関係にあるかを検討し、多様な二項対立（高い／低い、空／地上、太陽／人間）、時間の対立（緩／急、均等な持続／不均等な持続、夜／昼⁶²）について、互いに検討して、どのような変換（隠喩、換喩、反転、中間項の設定、縮約）関係にあるかを検討している。

熱帯アメリカの先住民の生活の中で、蜜とタバコ（煙草の灰）の占める位置は両義的と指摘される。火をかけられない自然の調理である蜜は、濃すぎて毒となり水で薄められる事さえある料理以前の食物であり、これに対して消費されるために火にかけられて灰となると言うパラドックスをもつ煙草であり、この蜜と灰は両義的な意味を抱えて、さまざまな対立関係（二項対立）に変換されるという「関係」が検討されて行く。

だが三巻以降では「ポロロ神話」（基準神話）と呼応する神話が選ばれ、検討される内容が項と項の関係へと広がっていく。たとえばジェ諸民族（南米）の中のアピナイエの諺、「男が産まれるとコンドルが喜ぶ、なぜなら、男は狩りをし、コンドルに死肉を荒野に残してくれるから。他方女の子が産まれるとトカゲが喜ぶ、なぜなら女は炊事をし、トカゲに食べ物のくずを落としてくれるから⁶³」を参照する事で、トカゲとコンドルの間には、男／女、火にかけた食べ物／生の食べ物という二対の対立が類推されていると示している。

三巻ではポロロとシェレンテ（ジェ族）という二つの部族の神話は互いに水の起源を語っていながら、その細部にわたって様々な 2 項対立の軸がちりばめられ、それが音、味覚など五感に響く印象となって、様々なアナロジーによって隠喩、換喩、反転されて広がっており、同一民族の神話の変換では意味のわからないままだった神話の細部の意味が、他方の神話の細部と思わぬ形での繋がりが気付かれて、徐々に明らかにされている。

「冒頭に置かれた神話の中心をなす、カヌーに乗ったふたりの男の物語は、神話に時間の次元を導入し、・・・⁶⁴」とされている。

レヴィ＝ストロースは、トゥクナ・インティアンの神話の「しがみつき女」のエピソードの解釈に難渋し、南アメリカの神話学全体からは解明できずに、北アメリカ大陸の先住民の神話へと研究の領域を広げるのだが、そこで「しがみつき女」と「蛙」の等価性を見出した事をうけて、その発想は我々の生きる現代社会でも民衆的な言い回しとして「しつこい」という表現に言い換える事ができるとしている。

そしてさらにこのような観念作用、思考の対象をそれと等値な対象によって置き換えた

⁶² レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P75 講談社選書 2009年6月

⁶³ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P185 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁶⁴ レヴィ＝ストロース 吉田禎吾 渡辺公三 福田素子 鈴木裕之 真島一郎共訳
『裸の人II』P886 みすず書房 2010年3月

り、その本質的性質を取り出したりするのは、哲学で言う「還元」の操作と同類のものである⁶⁵と指摘している。

四巻では、それまでの感覚的、形態的、関係的な対立のすべてを扱いながら、北アメリカ西岸の限定された地域の神話を扱って、ポロロの「鳥の巣あさり」を基準神話とする、感覚的な、そして意味論的な変換関係が探られ、その驚くほどの近似性が示される。

人間はかつて動物達と同じように「自然のさなかに生を亨け⁶⁶」ながら、やがて火を知り、身を纏い、時の流れを知り、やがて自然の動物種との間に隔たりを抱えつつ生を営む存在となった。隔たりこそが、文化の状態に移行した事によって引き起こされた事態であり、神話は自然の状態にあった従前の眺めとの差異、そのために引き起こされた感興を、多様な動植物種、人間と動植物との係わり、その姿を通して反芻し、その意味合い、いわば解題を記すものと言えよう。

この展開は「音韻論の導きの下に音あるいは声という感性的対象から始まり、味覚等の五感の対象に拡張された『自然から文化への移行を記す形式』は、多様な種によって担われる事で単なる受動的な感覚予見ではなく、生きている生物が能動的に提示する対立と相関の関係として、人間の思考を触発するものとなる⁶⁷。」とされる。

そしてさまざまな二項対立軸は、隠喩、換喩、反転などと広がってゆくのだが、レヴィ＝ストロースはこのような神話の構造を、さながらキリスト教の大聖堂や教会堂の正面を飾る薔薇窓にたとえ、バラ型模様と美しく呼んでいる。小田は「構造分析にとって神話とは、神話と神話の〈あいだ〉にある神話変換にほかならない⁶⁸」としている。

そしてレヴィ＝ストロースは「神話のディスクールはそれ固有の法則に従って展開して行く事を、示す事が出来たと思う。この法則は実例を通してその複雑さを示した論理メカニズムによって、各社会の技術・経済的下部構造にうまく適合している⁶⁹。」とも言う。

後にエリボンとの対話のなかでレヴィ＝ストロースは、4巻の題名「裸の人」について語り、「最初の出発点にもどっているのですよ。『裸のもの』(le nu) は、文化との関係で言えば、自然に対する『生のもの』(le cru) と同等のものですからね。最初の巻(Le cru et le cuit)

⁶⁵ レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P78 講談社選書 2009年6月

⁶⁶ レヴィ＝ストロース 吉田禎吾 渡辺公三 福田素子 鈴木裕之 真島一郎共訳

『裸の人Ⅱ』P895 みすず書房 2010年3月

⁶⁷ 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P193 平凡社新書 498 2009年11月

⁶⁸ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P189 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁶⁹ レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P98 講談社選書 2009年6月

の最初の語と最後の巻(L'Homme nu)の最後の語はつながっているのです。・・・⁷⁰」としている。

また神話論理を書き進めた当時を回想し次のように言っている。

「ある集団のある神話が、すこしちがった形で近隣の集団にあることが判ったとしますね。そうすると、その近隣の部族に関係した民族学的論文著作を全部読んで、それを取り巻く世界の中で、その技術、その歴史、その社会組織と言ったような、神話の変異に関係するかもしれない要因をすべて調べなければならないのです。私はこれらの部族たちと一緒に、又彼らの神話とともに暮らしていました。まるでおとぎ話の世界に生きているようでした』そして「私の体に神話が沁み込んでいました⁷¹。」と語り「まるで別世界に生きていたようでした。」とも語っている。

終わりに

渡辺は『神話論理』は、「人間が人間となった条件としての「食」と「衣」の起源を軸として、人間を取り巻くこの世界の森羅万象の起源をめぐる神話的思考を素材として繰り返し広げられ、最後は火をめぐる天と地の戦いの神話の分析によって閉じられる。⁷²」とする。

そして「なぜ人は火を使うのか、なぜ人は身を装うのか、なぜ人は親族関係のなかで生きるのかと言った人間の固有性を明らかにすると同時に、常に人間を動植物に集約される他の生命形態との共通性と差異において考えている事」を示している。そしてその基底には「自然の多様な生命との共感の感覚が流れている⁷³」としている。

人間は自然状態にあつての生物個体としての生命活動の中から、同じ人同士の中に我子／非我子、親族／非親族を見出し、言語によるコミュニケーションを行う文化の状態へと移行したのであろうか。神話とはそのことによって生じた自らを包む自然の中の、従前との異なり、差異、隔たりなどを、時々の感興、印象として記すに当たり、自らの命を包み込んでいる自然の動植物の営み、自然現象を媒介にして、記すものといえよう。

自然状態から文化の状態へと移行するひとびとにとっては、自然より他にこの感興を記す手立てはなかったと思われ、神話は、文化状態へ移行したことがもたらした様々な事柄

⁷⁰ レヴィ＝ストロース エリボン 竹内信夫訳 『遠近の回想』 P240 みすず書房
1991年12月

⁷¹ レヴィ＝ストロース エリボン 竹内信夫訳 『遠近の回想』 P239 みすず書房
1991年12月

⁷² 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P225 平凡社新書 498 2009年11月

⁷³ 渡辺公三編 『文化人類学文献辞典』 P 2 弘文堂 2004年12月

を反芻し、自然の中に生じた懸隔をみずからに納得せしむるための、隠喩、換喩、反転、そして両義的な意味を持つ自然の動植物を媒介にする項を重ねて、懸隔の縮約をはかりつつ、繰り広げられ、展開されている。

そして神話は、しかしながら解消できない自然状態と文化状態という二つの間の懸隔を、隠喩、換喩等の観念作用において、繰り返し繰り返し語っている事が示されたのであった。神話の大地は円いという。

そしてこれら神話のディスクールは、それは他の神話との比較、互いの変換の関係を解き明かすことによって初めて顕かにされ、気付かれたのであった。

一貧困概念と人間存在—レヴィ=ストロースを読む—神話の時間性と無意識

1. 神話の時間性と無意識

では、このような神話のえがく「構造」である『神話論理』の中には、「隠喩」「換喩」、「反転」「縮約や媒介⁷⁴」などのいわばアナロジーをもって変換される多重の二項対立のコード（符号）が内包されており、このコード（符号）は神話の場面毎、細部毎に変換されているのだが、その行方をコントロールする事柄、それに関連した事柄は見出しうるのだろうか？

①象徴機能⁷⁵

レヴィ=ストロースは神話論理の探求の真髓について「神話が人間の中で、人間に知られることなく、いかに思考するかである」といっているが、神話が思考するとは、神話論理の展開過程を指していると考えられる。

フロイドは『夢判断』の中で、「夢の顕在的内容と潜在的な夢思想とを区別しながらも、夢の本質は、その潜在的な内容にあるのではなく、変形を行う夢の作業にある」として、「無意識の本質を変換の構造的規則に求めている⁷⁶」とされる。この言葉に近い内容だが、レヴィ=ストロースは無意識について、「集積された記憶と心象の貯蔵庫」や「各自をかけがえの無い存在たらしめるいわく言い難い個人的諸特性の隠れ家⁷⁷」などではなく、一つの機能、変換を行う夢の作用——象徴機能——を指し示すとしている。

74 小田亮 『レヴィ=ストロース入門』 P228 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

75 同上 P233 6行

76 小田亮 『レヴィ=ストロース入門』 P234 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

77 小田亮 『レヴィ=ストロース入門』 P233 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

この表現は、音韻論による言語の記号としての性質に係わる、レヴィストロースの思想（方法論を含む）からの論理的展開であろう。神話とは、人間が自然状態から文化状態へと移行する過程で、人間の生命活動を包む自然の中に、ある差異を見出してなお生き続ける人々の感興、文化状態に移行したが故に問題となる事柄（火、調理、纏う一衣服、装身具等の起源等）を語るものだが、基準神話を設けてこれを基準として、離れた他部族の神話と比較対照してみると、その展開において互いにある種のアナロジーによって繋がる、変換関係が見出される。その変換関係の発生は、その時々における自由な、恣意的な、人における象徴機能によるものであり、浅田においては「象徴秩序⁷⁸⁾」との解釈である。

人間が自然状態から文化状態に移行したからこそ問いかける、人間の生存条件を構成する諸問題、それらを自然の動物種や植物種の営みとの類推関係、アナロジー関係をもって取り込んで記し、時々象徴機能による、隠喩、換喩、反転といった変換のもとで『神話』が語られている。

レヴィストロースは、神話論理をつくりあげるもの、その語る方向性を決めるものは、現実の出来事、事物に拘束されることのない、いわば無意識と言うようなものとする。しかしそれはユングでも、フロイドでも無い、「無意識のうちにはたらく、差異のみからなる体系⁷⁹⁾」であり、「問題となっているのはコード（符号）であり、それはある種の事柄だけを特別に表現しているのではなく、概念的道具を通じてある現象の次元を異なる次元へと変換する機能を持っている。⁸⁰⁾」と説明されているが、それが「象徴機能」であろうと思われる。

渡辺はこのような思考「野生の思考」について「対象から浮動して融通無碍なシステムを構成する自由度の表現⁸¹⁾」に他ならないとしている。

人間の象徴機能は、いわば多方位に向けて展開するのであろうから、各地、各民族の風土と自然的環境の多様性において、人の象徴機能、その構成する文化内容が展開しており、神話の論理はその展開過程が、薔薇窓様に多方位へと展開をしている事、その事を神話論理の分析が示していると思われる。

人間が文化状態に移行したが故に生じた従前との差異、それ故の感興、そしてその解題は「天体、昼夜の交換、季節の循環、社会組織、近隣部族との政治的關係」などと森羅万象を巡りつつ、反転、転喩などと変換を重ねつつ神話が展開していく。

78 浅田彰 『構造と力』 P37 勁草書房 1983年12月

79 小田亮 『レヴィストロース入門』 P071 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

80 レヴィストロース 中沢新一訳 『パロール・ドネ』 P56 講談社選書 2009年6月

81 渡辺公三編 『文化人類学文献辞典』 P2 弘文堂 2004年12月

レヴィ＝ストロースの神話論理の分析は、その語られる状況、語る側の心性、アメリカ先住民の内側、象徴機能の発現する時空に彷徨いこみ、探り当てると言った手法であり、アメリカ先住民との時空を超えた邂逅、その反芻の内に進められたとでも言えようか。

② 時間の流れ方

象徴機能をうけて変換される神話の展開、その時間性は「可逆的かつ不可逆的、共時的かつ通時的でもある⁸²⁾」という二重性を持つとされるが、共時態の中に通時態が「入れ子」のように埋まりこんでいる構造ともいうべき、時間性を示していると考えられよう。

神話は、自然状態から文化状態へ移行する人間にとっての、自然に刻みこまれた差異の意味の反芻であり、自然的生物の環境として連続していた自然に、今や刻まれた従前との違い、差異、亀裂、不連続性を語りつつ、その不連続となった事態の調整のための論理、胸に落とそうとする論理と思われる。

しかしこの自然から文化への移行の調整とは、差異をめぐる亀裂の調停であり、元に戻る事はできないのであり、消す事のできない変化、刻まれた差異のあちらとこちら双方を対峙させる二項対立を、さまざまにアナロジーを重ね、媒介項、中間項をつくり、あるいは対立する二つの両義的な意味を具有する媒介項（蜜や灰）を関与させて、差異、亀裂の縮約⁸³⁾を図っていると言えよう。

しかしながらその時、初期の二項対立軸、生のもの／火にかけたもの、裸／非裸（装身具、衣服をつける）、天の水／地上の水といった差異故の不連続は、様々に隠喩、換喩、反転されつつ消えることのない要素として「構造」に関与し続ける。

このような時間の流れは、弁証法的に正反合と止揚されて次の次元へと至るといった、その時代時代を牽引する要素は互いに吸収されあい、止揚されて新たな段階へ、異なる次元へと止揚されるという時間性とは異なり、二項対立が多重層的に重なりあい、解消され得ない二つの響き合いを繰り返しているといえよう。初期の対立は吸収されることなく、複合的な対立軸を重ね続けてゆくのであり、新たな次元へと吸収されて発展する歴史時間、弁証法的な正反合のイメージを否定する構造である。

このような時間概念は、野蛮から文明へという発展の道筋があつて、すべての文化はこの道筋の途上にあるとする、西欧近代的な常識が、覆されてゆく展開であろう。西欧近代のえがく歴史発展の図式、ヨーロッパ社会は先進社会であり、アフリカ、アメリカ大陸、

⁸²⁾ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P163 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

⁸³⁾ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P228 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

アジアの人々の文化、歴史の目指すべき方向がヨーロッパ社会であるとする論理を、その根底において否定する図式として浮かび上がるのであろう。

「野生の思考」という多方位へと向かう人々の象徴機能の展開である「神話」の読み解き、その経過を語る中から、レヴィ＝ストロースは近代科学的な思考は、ある限定された範囲に限極した上で可能ならしめる論理では無かったのか、それにも拘らず、それこそを十全な正義として進めていこうとする狭隘さ、虚構性を抱えていると語っているかのようである。そしてそれは 19 世紀的な近代的思考様式の相対化を促しているのであろう。

自然の中にあって、象徴作用と言うゼロの磁場による転換を繰り返す「野生の思考」の論理性は、対象を科学的に把握できる存在として、歴史発展の方向を理性的合理的に知る事ができるという自我、近代的自我における思考の狭隘さを浮き彫りにしている。

——自然と文化の関係へ——